

古田史学の会・東海

東海の古代

第135号 平成23(2011)年11月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

前号で掲載した「久留米リポート その2」
で述べられた「双脚輪状文」の論説です。

双 脚 輪 状 文

名古屋市 石田敬一

1 弘化谷古墳の双脚輪状文

双脚輪状文は、福岡県桂川町の王塚古墳と
広川町の弘化谷古墳、熊本県山鹿市の横山古墳
と熊本市釜尾町の釜尾古墳の全国で4例しか発
見されていない文様で、うちわに長い柄をつ
けて貴人にかざす翳さしばであるとする説が有力だ
ったようです。しかし、最近の研究結果では、
貝を表した文様とされます。私は双脚輪状文が
貝であるとする新たな説に疑義をもち、『久留
米リポートその2』において、弘化谷古墳の
双脚輪状文についての考えを述べました。

弘化谷古墳の双脚輪状文が何を描いている
のかの決めるには双脚輪状文の左横に付いた
双脚にあると思います。しかし、これまでその
双脚が何であるかを明確に示した説は無いと
思います。この紐状の双脚が何であるかを示
さなければ、単に貝だとか鏡だとか主張し
ても説得力はありません。私は先のリポート
で、その双脚は、鏡に付いている紐をデザ
インしたものであるとして、その思考過程
を示しました。その上で、弘化谷古墳の
双脚輪状文は、鏡であると結論づけまし
た。



おおとぼなみなみ
大戸鼻南古墳



長迫古墳石材に刻まれた紐と鏡

<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Ocean/8043/>

その思考過程を以下にもう少し詳しく示し
ます。
大戸鼻南古墳や長迫古墳では、鏡を上からぶ
らさげた紐が石材に陰刻されています。まっす
ぐな直線によって上から紐で吊した鏡を表現し
ているのです。しかも大戸鼻南古墳のものは、
その吊り下げた紐は2本で陰刻されていること
がしっかり確認できます。1本の紐を鏡の鈕に
通して吊しているため2本になるのです。これ
は陰刻が抽象的な形ではなく具体的な形で描か
れていることを表しており大変重要なポイント

であると思います。2011年9月に韓国の国立扶余博物館に行き、そこで吊り下げられた鏡を見て大戸鼻南古墳や長迫古墳の陰刻は、紐で吊り下げられた鏡であるとの確信を持ちました。



国立扶余博物館展示



弘化谷古墳の双脚輪状文（レプリカ）

これに対し弘化谷古墳の壁画は、双脚輪状文とともに、その左右に双脚のない同じ大きさで同じような文様が描かれている円形文様があります。船とペアで描かれた円形文様は天体ですが、このように連続した円形文様は天体ではなく、鏡を表現していることは先のレポートで示したところです。従って双脚が無ければ、この2つの双脚輪状文は、まず鏡であるといえましょう。

そこで左横に付いているこの双脚が何であるのかを調べる必要があります。弘化谷古墳の双脚を観察すると、円形文様の横から出て曲線を描いています。そして、その双脚は左のものと右のものとは形が異なります。つまり形が固定的なものではなく可変性のあるものであるということがわかります。可変性があるということは物理的に形を変えることが可能な物でできていることを示します。しかも大戸鼻南古墳の

陰刻のように抽象的ではなく具象性をもって描かれているはずで、となるとすでに紐で上から吊り下げられた鏡があることがわかっていますから、私は、この文様を吊り下げられた紐がほどかれた姿であると考えました。紐をほどいて鏡を横たえると2本の紐に分かれて曲線を描きます。この紐がだりとした状態を美的に表現したのが弘化谷古墳の双脚輪状文であると提示したのです。

となると、鏡を横たえる必要があるかどうか、そうした必然性があるかどうかの問題になります。

鏡をその凹凸の形から分ければ3種類になります。すなわち平面鏡、凸面鏡、凹面鏡です。鏡は光を反射し物を映し出すという基本的な性質をはじめ霊的なものを映し出したり、悪霊を排除する力をもつ道具でもあると思います。また、太陽光を反射させるには凸面鏡が最適であったでしょう。凸面鏡は、シャーマンが体にぶら下げるなど、基本的には吊り下げられて使われたと思います。もう一つは太陽光を集めて発火用にしたたり月光を集光する多紐細文鏡などの凹面鏡です。これを、たとえば発火用として使うためには、横たえて太陽の方向に上向きにしなければなりません。つまり鏡は使われ方によって吊り下げたり横たえたりしたはずで、横たえた鏡は紐に付いた紐が曲線を描きながらだりとし、この状況を具象的に表現したのが弘化谷古墳の双脚輪状文であると思います。

先述の国立扶余博物館において、横たえた鏡を見ました。双脚は紐であり弘化谷古墳の双脚輪状文は鏡を表現したものであると再認しました。撮影した写真は紐の部分がわかりにくくなってしまい残念です。



国立扶余博物館展示

ところで、双脚が紐であるという考えに違和感を覚える人が多いと思います。しかし鏡には通常紐をつけるための鈕ちゆうがあり鏡と紐はペアと考えてよいものです。鏡と紐は切り離せない一体の物と考えて間違いありません。

いずれにしろ、私が紐であると主張した文様について、紐であるかどうかも含めて明確にこれだと述べられた学者はいないと思いますので、一つのまとまったテーゼを示すことができたと考えています。

2 釜尾古墳の双脚輪状文そうきやくりんじようもん



釜尾古墳の双脚輪状文(復元)



左：王塚古墳の双脚輪状文（画質調整）



右：横山古墳の双脚輪状文・判別が困難

弘化谷古墳そうきやくりんじようもん以外の双脚輪状文は、久留米巡りとは直接関係がなかったので「久留米リポートその2」では深く言及しませんでした。ただ、貝を表しているという説には疑義を表明しました。



カサガイ



スイジガイ

再度、貝ではない理由を挙げます。王塚古墳や釜尾古墳の壁画のように、縁にギザギザがある貝は、①カサガイやスイジガイなどが考えられますが、私が調べた範囲では全く同じ形の種類はないこと。また、②貝だとすれば足が大きいこと。さらに、③釜尾古墳の双脚輪状文は貝殻の上から足がでており貝の図形として不自然であること。これらの点を指摘し、王塚古墳や釜尾古墳の双脚輪状文を貝とするのは疑問であるとしてしました。

双脚輪状文そうきやくりんじようもんといっても王塚古墳や釜尾古墳のものは、円形文様に紐が付いている弘化谷古墳のものとは全く趣きが違います。まず、釜尾古墳の双脚輪状文そうきやくりんじようもんについて述べます。



釜尾古墳の双脚輪状文（復元）

釜尾古墳の写真をみると、双脚輪状文そうきやくりんじようもんの周りは三角文が取り囲んでいるのがわかります。いちばん右にあるものも、うっすらですが周りに三角文が確認できます。一方で、双脚輪状文そうきやくりんじようもんの上方や右に描かれている二つの円形文様の周りにも三角文があります。つまり双脚輪状文の周りにも、円形文様の周りにも三角文があります。

これを踏まえて双脚輪状文と、隣接する円形文様とを見比べると、ギザギザの有無、色や線の太さなど円形の中の模様は違いますが、こ

^{そうきやくりんじようもん}の双脚輪状文と近接する円形文様は、同じように三角文で囲まれており、この三角文と組みになって図形が構成されています。

おおかたの見方は、^{そうきやくりんじようもん}双脚輪状文のみか、円形文様のみ注視しその周りに描かれた三角文と分離して図形を認識しがちです。しかし、ともに周りに三角文を伴った図形であると認識することが重要です。

後漢鏡の一つである方格規矩鏡や日本製の三角縁神獸鏡には、その縁に下の写真のような連続した三角の文様「鋸齒紋」があります。



方格規矩四神鏡（佐賀県桜馬場遺跡）の鋸齒紋



多紐細文鏡（佐賀県・宇木汲田遺跡）

この連続する三角文を伴った図形は、まさに銅鏡の特徴を抽象化したものではないでしょうか。ただ方格規矩鏡や三角縁神獸鏡の三角文は、釜尾古墳の^{そうきやくりんじようもん}双脚輪状文と比較すると三角文の大きさが細かいようです。しかし、後漢鏡の中にはもっと大きな三角文を有する鏡があります。後漢鏡の一つである^{たちゆうさいもんきよう}多紐細文鏡には、方格規矩鏡や三角縁神獸鏡より、さらに大きい三角文様

^{たちゆうさいもんきよう}が見て取れます。多紐細文鏡（佐賀県・宇木汲田遺跡）の四角の枠で囲んだ部分を拡大してみると、その三角文様がよくわかります。



多紐細文鏡（佐賀県・宇木汲田遺跡）拡大

そして、^{たちゆうさいもんきよう}多紐細文鏡よりさらに古いとされる^{たちゆうそもんきよう}多紐粗文鏡には、もっと大きな三角文様があります。国立扶余博物館で^{たちゆうそもんきよう}多紐粗文鏡を確認してきました。確かにその鏡に三角文様の原形があると思います。



多紐粗文鏡（韓国扶余国立博物館蔵）

これは、^{そうきやくりんじようもん}双脚輪状文を囲む三角文の大きさとイメージがよく合います。三角文は鏡を表現する重要な文様の一つであることに間違いのない

でしょう。

したがって、私はこの釜尾古墳の三角文で囲まれた双脚輪状文は鏡であると考えます。

なお、平原古墳の方格規矩鏡について、原田大六氏や岡村秀典氏は中国鏡とされ、柳田康雄氏は日本国産の鏡とされ、舶載か仿製か専門家の間でも意見は分かれるようです。

3 ギザギザ模様がある内行花文鏡

鏡の中には、釜尾古墳や王塚古墳のギザギザ模様がある双脚輪状文に似た鏡があります。それは、やはり後漢鏡の一つである内行花文鏡です。ギザギザ模様が印象的です。

三雲南小路遺跡の内行花文鏡は、日本国産の鏡（原田大六氏）とされますが、まさにそのギザギザ模様がある鏡の代表です。1号甕棺墓からは、35面の鏡をはじめ銅戈、銅劍、銅矛、勾玉、管玉、璧などが出土しています。



内行花文鏡(福岡県三雲南小路遺跡)

この三雲南小路遺跡の1号甕棺墓は、1～2世紀の墓であり倭国王帥升に繋がる王墓ではないかと思われる大変重要な遺跡であり、その遺跡から出土した鏡なのです。

こうした鏡をモチーフにしてデザインしたものが釜尾古墳の双脚輪状文であると思います。

この内行花文鏡などの鏡には、中央に紐を通す鈕があり紐が通っています。日本で発掘された鏡に絹のかすなどは残っていた例があります

が紐は見つかっていないようです。ところが、中国の新疆ウイグル自治区の後漢墓から出土した内行花文鏡には、幸いにも緑色の絹紐が付いていました。この絹紐が付いた内行花文鏡は、釜尾古墳の双脚輪状文にたいへんよく似ているように思います。同心円文は鏡をシンプルにデフォルメして描かれた図形です。同様に、私は釜尾古墳の双脚輪状文はこの紐が付いた内行花文鏡をベースにその特徴をダイナミックにデフォルメして描かれた文様であると思います。中央の目のような同心円や角状の尖り方などに内行花文鏡との類似点が見られます。



後漢墓出土(新疆維吾爾自治区博物館蔵)

<http://abc0120.net/words/abc2008011302.html>

つまり釜尾古墳の双脚輪状文の足のような模様は、紐であり、双脚輪状文は鏡を表現していると考えます。

釜尾古墳の双脚輪状文と内行花文鏡の図形を取り出して見比べます。



左：釜尾古墳の双脚輪状文(写真調整)

右：新疆維吾爾自治区出土(写真調整)

釜尾古墳のものは、描いた人の美的センスが

色づかいに反映されており、大きくデフォルメされて尖角がハッキリ、太く強調されています。形がややゆがんでいますが、これは斜めから鳥瞰図のように描いたように見えます。その尖角の形や、尖角と尖角の間の曲線は内行花文鏡の形によく似ています。また、中心に描かれた同心円は、くっきりと眼のように描かれており、鏡の鈕ちゆうによく似ています。そして、そこから出ている2つの足は、この鈕ちゆうから伸びている紐をやはり太くデフォルメして描いていると思います。

なお、前述したカサガイやスイジガイには中央に同心円の模様はありません。したがって双脚輪状文そうきやくりんじようもんはこれらの貝を描いたとは思えません。この点からも貝は候補になりえないといえるでしょう。

4 王塚古墳の双脚輪状文そうきやくりんじようもん



王塚古墳の双脚輪状文

王塚古墳そうきやくりんじようもんの双脚輪状文の周辺にも円形文様があり、また奥壁にはびっしりと三角文が描かれています。鏡の特徴の一つである三角文と一緒に描かれた円形文様は鏡を表しています。したがって王塚古墳そうきやくりんじようもんの双脚輪状文についても基本的には釜尾古墳と同様に鏡と紐であると思います。王塚古墳そうきやくりんじようもんの双脚輪状文が釜尾古墳のものとは異なる点は、ギザギザの数が多く、紐が中央から出ていない点です。

ギザギザの数が多く鏡としては須玖岡本遺跡から出土した草葉文鏡があります。前漢の時代の鏡とされます。

また、方格規矩鏡の鏡の中の文様の一つとして、多尖の鏡をデフォルメしたと思われる文様があります。王塚古墳そうきやくりんじようもんの双脚輪状文はこれらと同様の鏡を表現しようとしたのかもしれない

ん。



須玖岡本遺跡出土の草葉文鏡（レプリカ）



方格規矩鏡の鏡の中の鏡文様

重要なことは、倭人の中国鏡に対する憧憬の念です。弥生の墳墓では実物の漢代の鏡を埋納することができました。しかし古墳時代には中国鏡は手に入れにくくなり、中国鏡を描いたり、陰刻したりすることで、それに代えたものと思われる。近年多数の鏡が埋納されていたことで注目された奈良県天理市柳本町の黒塚古墳では、34面の鏡のうち中国鏡は、被葬者の頭部に立てられた画文帯神獸鏡ただ1面のみでした。

画文帯神獸鏡以外は日本製の三角縁神獸鏡が木棺の外側で33面出土しています。この古墳は3世紀後半から4世紀前半の古墳時代前期に築造されたとされ、この時期には中国鏡は手に入りにくい状況であったことをうかがわせます。逆に言えば、日本製の三角縁神獸鏡は、手に入ることが比較的容易であったといえましょう。この黒塚古墳の三角縁神獸鏡と同じ原形で作った同範鏡が宮崎から群馬までの15府県に21種類、58枚が見つかっており多数流布していた鏡であることがわかります。

また、桜井茶臼山古墳からは81面の鏡の破片が見つかり注目を集めました。ここには多種多様な鏡の破片がありましたが、完全な形に復元できる鏡が一つも無かったということです。いろいろな鏡の小片の中では三角縁神獸鏡の種類が1/3を占めるとのことです。これは一種類の鏡を割ったものが埋納された平原古墳とは違う点です。各地から持ってきたと考えられ広範囲な交流があったことをうかがわせるとともに、完形の鏡が手に入りにくい状況を示していると思います。この割った鏡を埋納する方式は九州の弥生王墓の風習を引き継ぐものであり、桜井茶臼山古墳の被葬者は九州系の王であろうと思われる。この古墳の東200mには初瀬街道（国道156号）を挟んで宗像神社があり関連性を強く感じさせます。

なお、王塚古墳の双脚輪状文について、紐が中央の鈕から出ておらず、鏡に隠れて、その縁から出ているように描かれています。それは、この文様が鏡の表、鏡面を描いているからではないかと思えます。裏側の文様が鏡面に透けて見えている状態を描いたと思われる。弘化谷古墳の場合も紐が鏡の縁から出ているので、同様に鏡面を描いたのでしょう。

5 双脚輪状文の結論

平原遺跡から出土した直径46.5cmの内行花文鏡は、原田大六氏が八咫鏡に間違いないとされた鏡です。三種の神器の一つである八咫鏡は装飾古墳に双脚輪状文を描いた古代人にとって憧憬の鏡であったでしょう。釜尾古墳や王塚古墳の双脚輪状文は、中国鏡や八咫鏡など特別の鏡をモチーフにして描くことで死者に最大

の弔いを行おうとしたのではないのでしょうか。

これまで述べてきたとおり、弘化谷古墳の双脚輪状文と、釜尾古墳や王塚古墳の双脚輪状文とは、その趣がずいぶん異なりますが、結論としては、ともに紐が付いた鏡であるというのが、私の考えです。



八咫鏡とされる平原遺跡出土の内行花文鏡

6 石人山古墳の直弧文

石人山古墳の直弧文は鏡を割った姿をデザインしたものであると『久留米リポートその2』で示しました。一見複雑に見える弧は、基本的に円弧を描いていて、その円弧を斜めにたすきがけの直線で区切っている形が、円い鏡を割った文様であることから、直弧文は「割った鏡」であると結論づけました。弥生の墳墓からは故意に割られて埋納された鏡が出土します。この鏡が容易に手に入らない古墳時代には現物のかわりに、割った鏡をレリーフで描くことなどで代用したのだと考えられます。

西暦239年（景初3年）に邪馬壹国の女王卑弥呼は魏に使いを遣わし、100面の銅鏡を授かりました。中国鏡は3世紀の倭人にとっても重要なアイテムであり、その信仰は弥生時代から続き、古墳時代の終わりになっても根強く残っていたと考えられます。

そして、先のリポートの直弧文の説明でも記述したとおり、私はその風習が正月の「鏡割り」に残っているのではないかと考えています。「鏡割り」の由来ははっきりしません。ただ、なぜ餅なのに鏡というのか、なぜ割らなければならないのか、なぜ正月明けに行うのか、疑問が湧

きます。この直弧文について考えるにあたり、私は「鏡割り」に注目しました。

正月があけた後に「鏡割り」が行われます。鏡餅をお供えし割って食べることによって家族の繁栄を願う日本の風習です。韓国では正月に餅をお供えしますが、四角であり鏡餅という言葉もないそうです。

正月には、死者や先祖の御魂^{みたま}が子孫のもとを訪れます。これを祀るために鏡に擬えた餅をお供えするのだと思います。本来は餅ではなく鏡をお供えしたため鏡餅と呼ぶようになったのかもしれませんが、餅ならば均等になるように分けることもできますが、たぶん本来は鏡であったので割るのだらうと思います。餅を鏡に擬えてお供えすることと、それを槌で小さく割り砕く行為、私はここに鏡を割って墳墓に埋納する名残があるような気がします。

また、日本では葬儀のあと門口で故人の茶碗を割る「茶碗割り」や藁を燃やして送り火を焚く「門火」の風習があります。それを行う意味は死霊が再び家に戻らないで成仏してあの世に行けるように願うためのものです。悪霊にならないための儀式ともいえましょう。

群馬県前橋市にある小二子古墳は、6世紀後半の築造で、横穴式石室を持つ方円墳です。この古墳の石室前に火を燃やした跡と土器の破片が見つかったとのことです。現在の「茶碗割り」や「門火」の風習に繋がるものではないかと思っています。

直感では、シャーマンなどが呪術により邪悪なものを鏡に封じ込め、それを割ることによって邪悪なものを粉碎し、被葬者の靈魂を守るのではないかと考えましたが、それでは粉碎した鏡を墳墓と一緒に埋納する意味が弱いように思います。邪悪なものを封じ込めるのではなく、この世に被葬者の魂が戻らないように鏡を割り、成仏するように、また悪霊にならないようにお供えしたと考えれば墳墓に埋納する意味がよりリーズナブルであるように思います。

なお、「鏡割り」は「鏡開き」とも呼ばれますが、これは「割る」という言葉が縁起が悪いのでこれを嫌った新しい概念によるもので、オリジナルは「鏡割り」だと思います。

以上

本会恒例の「秋の史跡巡り」を平成23年9月27日（火）に行いました。その訪問記です。

美濃國巡り（美濃紙と刃物の里）

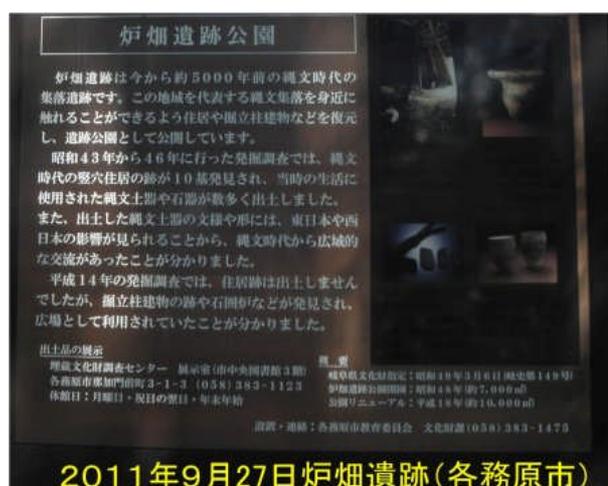
名古屋市 加藤勝美

行く先：岐阜県各務原市、関市、美濃市

訪問日：平成23年（2011年）9月27日

「古田史学の会・東海」の秋の旅行として計画され、竹内会長以下6名で出かけた。目的地は南濃から中濃にかけての一带。絶好の秋日和に恵まれ、快適な一日旅行となった。

1 炉畑遺跡公園



県都岐阜市の東側に各務原市、坂祝町（さかほぎちょう）および美濃加茂市が連なっている。そこを中山道（現国道21号線）がほぼ東西に走っていた。名古屋から北方に向かって国道17号線を各務原市に向かって走ると、中山道に出る少し手前、右側（東側）に右折したところに遺跡公園が造られている。掲示板によると、この遺跡は約5000年前の縄文時代の集落遺跡とのことである。掲示のなかほどにこうある。

出土した縄文土器の文様や形には、東日本や西日本の影響が見られることから、縄文時代から広域的な交流があったことが分かりました。

注目に値する記述であろう。

この後、私たち一行は各務原市埋蔵文化センターに立ち寄った。炉端遺跡から出土した土器の一部を見るためである。



当時の住居はこんな形であったろう、と想定されたものが復元されていた。雪深い山中の生活が忍ばれて興味深かった。

2 山田寺、石川麻呂の墓



通常山田寺というと、奈良県桜井市の廃寺を指す。蘇我馬子の孫である蘇我倉山田石川麻呂の開基とされる寺である。ところがここ各務原市にも山田寺があったとされ、その心礎を奉じて新たに山田寺が復興されている。心礎そのものはやや西側の無染寺境内から発見されたという。



さらに、山田寺に関連して、石川麻呂の墓も各務原市内にあったという伝承があり、その墓が写真の墓とされている。

3 岐阜県博物館

私たち一行は石川麻呂の墓を最後に各務原市をあとにした。目指すは北方の関市である。最初に訪ねたのは関市内に建てられている岐阜県博物館である。各種の土器に加えて恐竜の骨格等見所の多い博物館。が、私の場合、時間の関係もあってじっくりとは観察できずじまいだった。ただ、古代土器に描かれた船の説明があつて、漕ぎ手が80人にも及ぶ大型船だったこと

を知って強く印象に残った。



造されている。



5 美濃和紙の里



4 弥勒寺跡、円空館



関市には古代寺の弥勒寺跡というのがある。「円空仏」で知られる江戸中期の僧、円空が再興したという古寺である。円空はこの地で没したとされ、円空にちなんだ円空館もこの地に建



最後に、関市をさらに北上して美濃和紙の里を訪れた。旧今井家にお邪魔して色々な和紙や印章を見て回ったが、興味深かった。一番印象的だったのは商家の屋根と屋根に作られた「うだつ」、とりわけその町並みだった。江戸時代の町並みをとどめる美濃和紙の里は、かつて私が訪れた奈良井宿、高山の町並み等々を思い起こ

させて気が安らいだ。ただ、残念なのは屋根にあがったうだつの写真がうまく撮れていなかったことである。やむなく地元でいただいたパンフレット「和紙とうだつのまち」に掲載されている写真の一枚を紹介させていただくことにした。空中に張り出したうだつの様子をうかがい知る参考になれば幸いである。

末尾となってしまったが、一緒に同行した5名の仲間には本当に楽しいひとときを送らせていただき、深く感謝申し上げたい。

前号で発表した、古代逸年号を掲載している年代記類の追加です。

古代逸年号資料『塵荊鈔』について

瀬戸市 林 伸禧

はじめに

前号（134号、平成23〈2011〉年10月）で古代逸年号を掲載している年代記類を報告したが、新たに『塵荊鈔』を報告する。

写本は、国立国会図書館に収蔵されているのが唯一である。なお、国立国会図書館—電子図書館のデジタル化資料—古典籍資料（貴重書等）で、11巻中1～4・9～10巻が閲覧出来る。

翻刻・活字本は古典文庫『塵荊鈔』上・下（編者・市古貞次、発行・古典文庫、昭和59（1984）年1月）がある。

1 解説

この文献の解説で市古貞次は作者は、

相当な学識を持った公家の末流で、世に容れられず隠遁・出家した者で、内容から推して叡山に関係深く（「吾山」と云う語もある）、禪宗に親しんだ老隠居であろうと察せられる。（『塵荊鈔』上、366頁）

なお、松原一義は『塵荊鈔の研究』*1 で具体的に名前をあげている。

この『塵荊鈔』の序文をもとに、具体的に、『塵荊鈔』の著者を想像し、武家歌人の木戸孝範をあげるに至った。（『塵荊鈔の研究』98頁）

成立年代は

本書は文明14（1482）年（※室町幕府12代將軍義尚時代）ごろの執筆にかかり、ある部分は延徳三年（一四九一）に書きつがれたものとして、大過あるまいと思われる。（『塵荊鈔』上、368頁）

内容は、大部分は問答体で記述され

しかしこういう児物語風の記述は第一・第十一のみであって、中間の九冊は、仏教、神事、歴代天皇及び源平両氏の列伝や文学・遊芸その他諸般の知識の列示なのである。雑纂、乃至は類書というべき内容が大部分を占めて居る。（『塵荊鈔』上、372頁）

記述の参考文献として、

また本書の記述には「日本書紀」「平家物語」「沙石集」「元亨釈書」「八幡愚童訓」「三国伝記」「壺囊抄」「密伝抄」等々によったと考えられる箇所があり、当代のこの種の書と同様に、他の記述にも出典があらうと思われるが、他日を記したい。

（『塵荊鈔』上、374頁）

と述べている。

2 古代逸年号の掲載状況

- (1) 年号の掲載状況は、別紙「古代逸年号資料（「年表・年代記」編）」参照のこと。
- (2) 年号は、欽明天皇13年の貴楽から文武天皇4年の大化まであり、年号群は「(3)」を除いて『二中歴』と一致（年号には異称がある。）する。
- (3) 『二中歴』系年号以外の年号は、次のとおりである。

① 卅七代孝徳天皇白雉四年癸丑二元興寺ノ道昭和尚廿二歳、多武峰ノ定恵和尚共ニ入唐シ玉フ。乃唐ノ高宗永徽元年（※四年）也。

……

又定恵和尚者大織冠鎌足公ノ養子、孝徳帝ノ真子也。白雉四年渡唐シ恵日寺ノ神泰ヲ師トシテ習字十歳、又法相ヲ玄奘ニ云テ、……

（下線は筆者。『塵荊鈔』上、99頁）

『日本書紀』では、道昭和尚等の唐渡は

*1 『塵荊鈔の研究』：松原一義著、2002（平成14）年2月10日、（株）おうふう。
『塵荊鈔』記述の根拠たる文献については述べているが、古代逸年号や日本記については何ら述べていない。

10月例会報告

孝徳天皇白雉四年癸丑である。『二中歴』では、「孝徳天皇紀」は白雉三年までである。また、孝徳天皇白雉四年は唐の「高宗永徽四年」である。

② 問云、吾朝へ達磨和尚来化後、禅法渡朝ノ時代。

答テ曰、卅七代孝徳天皇白雉四年癸丑唯識ノ高祖道昭入唐ノ時、玄奘三蔵ニ稟禅法、皈朝而元興寺東南之隅ニ堂禅苑昭ニ随而学禅者多カリキ。（『塵荊鈔』上、153頁）

③ 四十三代元明女王（※四十二代天武天皇）白鳳八年（※庚辰）ニ伽藍營構之規ヲ求ム。祚蓮入定テ、竜宮ノ見伽藍出定造式ヲ奏ス。帝悦テ薬師寺ヲ建立ス。（『塵荊鈔』上、206頁）
薬師寺建立は、『日本書紀』・『薬師寺東塔擦盤銘』から天武天皇即位白鳳八年庚辰（元年は癸酉）である。

④ 卅七代孝徳天皇
諱輕居、皇極弟也。大化元年乙巳、治十ヶ年。此時大連宮ヲ留ム。
五年己酉ニ始テ八省百官ヲ置、接津長柄豊浦宮ニ居ス。
此元年太宗貞観十九年当ル。命長〔尚〕二年、当色五年、白雉三年己上十ヶ年也。
（『塵荊鈔』下、132頁）

大化元年乙巳は『日本書紀』・『皇代記』掲載年号で、唐の貞観十九年である。また、乙巳年は命長六年であり、『二中歴』年号と一致する。

3 『塵荊鈔』の特色

(1) 年号は、一部を除いて『二中歴』系年号で記述されている。特に、歴代天皇の略歴で、欽明天皇から文武天皇の大宝までの天皇在位年は古代逸年号で記述されており、他の文献にはない記述である。また、天皇紀元年を中国年号でも記述している。

天皇の在位年数と古代逸年号との関係及び中国年号の関係は、表1のように記述されている。

(2) 文中の引用で、『日本記』を明示して記述しているのが多々ある。『日本記』については後述する。

○ 南知多町の貝塚について

名古屋市 石田敬一

2011年の春に南知多町郷土資料館に行ってきた際の報告で、次の4つの貝塚を紹介した。

- 1 紀元前6300年頃の縄文海進を日本で最初に確認された先苺貝塚まづかり
- 2 縄文早期と前期を分けるアカホヤ火山灰が確認された清水ノ上貝塚
- 3 東海地方の縄文中期の土器編年の指標となる咲畑式土器の設定に成果があった咲畑式貝塚
- 4 近隣の縄文人に比べ風習や骨格が異なる屈葬人骨が発見された林ノ峰貝塚

○ 海底遺跡が語る貞観地震について

名古屋市 石田敬一

2011年8月16日（火）の日本経済新聞の記事を示し、火山・地震活動が遺跡を海底に沈めた伝説が事実であった事例を紹介した。

○ 「大王」2つの副室謎残したまま封印について

名古屋市 石田敬一

桜井茶白山古墳で発見された副室について、2011年6月15日（水）の中日新聞の記事を示し、中身は調査されなかったため不明であるが、狗葬者の可能性が高いのではないかと示唆した。

○ 法隆寺所蔵「笠評の君」刻印観音像についての考察

知多郡阿久比町 竹内 強

法隆寺から献納され、現在は国立博物館に収蔵されている「観音菩薩立像」の台座に記述されている銘文

辛亥年七月十日記笠評君名大(又は左)古臣辛丑日崩去辰時故児在布奈

太利古臣又伯在口古臣二人乞願

の解釈については、次のような問題点がある報告した。

・「辛亥年」は西暦（和暦）何年か。

表 1

古代逸年号記述状況

代	天皇	在位年数	在位年数と古代逸年号との関係記事	天皇紀元年と中国年号	備考（校訂）
30	欽明	32	治卅二年。 此朝十三年ヨリ号始テ、貴樂元年壬申二年、法請三年、兄弟一年、藏知五年、師安知僧五年、金光二年。	此元年庚申、震旦ハ蕭梁武帝大同六年ニ当ル。	法請三年→法請四年 師安知僧五年→師安一年、知僧五年 ※計18年→計20年
31	敏達	14	此治二年。…… 此元金光六年壬辰、治十四年。 金光尚四年、賢勝五年、鏡常四年、勝照一年、已上十四年也。	朝元年壬辰、震旦ハ宣帝大建四年也。	此治二年→此治十四年也 金光六年壬辰→金光三年壬辰
32	用明	2	此朝治二年。 勝照 尚二年訖也。	元年乙巳、震旦ハ随文帝開皇六年ニ当ル。	元年乙巳→元年丙午
33	崇峻	5	治五年。 勝照 尚一年、端政四年、已上五ケ年。	勝照四年戊申ニ即位。 元年開皇八年ニ当ル。	
34	推古	36	治廿六年。 此朝ノ年号、端政一年、吉貴七年、願転四年、光充六年、定居七年、京繩五年、仁王六年已上卅六ケ年也。	此朝元年、震旦ハ開皇十三年癸丑ニ当ル。	治廿六年→治卅六年
35	舒明	13	元年己丑、治世十三年。 聖六年、僧要五年、命長二年、已上十三ケ年也。	此字元年己丑、唐太宗貞觀三年当ル。	聖六年→聖徳六年
36	皇極	3	治三年。 命長 尚三年訖也。	此字元年壬寅、太宗貞觀十六年也。	
37	孝徳	10	大化元年乙巳、治十ケ年。 命長 尚二年、当色五年、白雉三年已上十ケ年也。	此字元年太宗貞觀十九年当ル。	
38	斉明	7	元年乙卯、七ケ年。 白雉 尚六年、白鳳一年。	此元年、高宗永徽六年ニ当ル。	
39	天智	10	元年壬戌、治十ケ年。 白鳳 尚十年訖也。	此字元年壬戌、高宗龍朔二年也。	
40	天武	15	元年壬申、治世十六年也。 白鳳 尚十二年、朱雀三年、朱鳥一年、已上十六ケ年。	此字壬申、高宗咸亨三年也。	朱雀三年→朱雀二年、十六(ケ)年→十五(ケ)年。
41	持統	10	元年丁亥、治世十年。 朱鳥 尚八年、大化二年、已上十ケ年也。	此元年丁亥、武后垂拱三年也。	
42	文武	11	元年大化 尚四年、天宝二年、慶雲四年、已上十一ケ年也。	此字元年丁酉、武后神功元年	天法→大宝

- ・「評」は九州王朝の作った行政区画？
- ・「笠評」の所在地はどこか。
- ・「崩」は天皇・皇后・皇太后の逝去に使われる単語であるが、なぜ使われているか。
- ・〇〇古臣とは？

○ 魏志倭人傳における「景初2年卑弥呼の朝献」について

瀬戸市 林 伸禧

『三国志』魏書卷卅 烏丸鮮卑東夷伝倭人條
景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝献

の「景初2年」は誤りで、「景初3年」（通説）であると云う説と、原文どおり「景初2年」（古田武彦、水野祐他）であるとの2説があり、改めて検討した。

景初3年説の根拠として、鳥越憲三郎著『中国正史 倭人・倭国伝全釈』及び佐伯有清著『魏志倭人伝を読む』より説明し、景初2年説は古田武彦著『「邪馬台国」はなかった』により説明した。

検証は、『三国志』魏書の帝紀（景初～正始）・列傳（公孫伝度）・東夷（韓伝・倭人伝）により年表を作成し、卑弥呼時代の遼東半島・朝鮮半島の地図により検討した。

結論として、卑弥呼の朝献は景初2年に行われたと述べた。

○ 神武天皇の熊野侵入譚の検証

名古屋市 佐藤章司

「天孫降臨説話と神武天皇熊野侵入譚は元々一体の説話」だったについて、この説話の登場人物、語られている地形、地名等の細部に於いて検討した。

- 1 登場人物については、天っ神の御子、国っ神、高倉下、高木の神、八咫鳥、道臣命（大伴連の祖）、大久米命（久米直の祖）、ニギハヤヒ命とナガスネヒコ、土雲、天孫等
- 2 地形については、吉野川の川尻、可夫羅前（前は岬、崎、碕と同義）、～〇〇丘崎の検証をして、神武天皇の熊野侵入説話は元々ニギの命の天孫降臨説話から盗用と転用がされていると結論づけた。

又、ニギハヤヒ命とナガスネヒコは天孫降

臨の時間帯に生きた人間であり、北部九州に拠点を持つ物部氏の遠祖であろうとした。

なお、木花之佐久夜毘売の登場は、ニギギ命が短命であったとするためにこそ、『古事記』編纂時に挿入された。

11月例会に参加を

日時：11月20日（日）午後1時30分～5時

場所：名古屋市市政資料館（第1集会室）

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

参加料：500円（会員無料）

交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- ・ " " 「清水口」下車、南西徒歩8分
- ・ " " 「市役所」下車、東へ徒歩8分

駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容（無料）
- ・ウィルあいち（愛知県女性総合センター）地下駐車場：南隣、有料（30分170円）
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料（40分200円）

今後の予定

12月例会：12月18日（日）名古屋市市政資料館

1月例会：1月29日（日）名古屋市市政資料館

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

例会は、12月が**第3日曜日**、1月が**第5日曜日**です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会出席者へお願い

例会に出席される方は、「東海の古代」本号を持参されるようにお願いします。